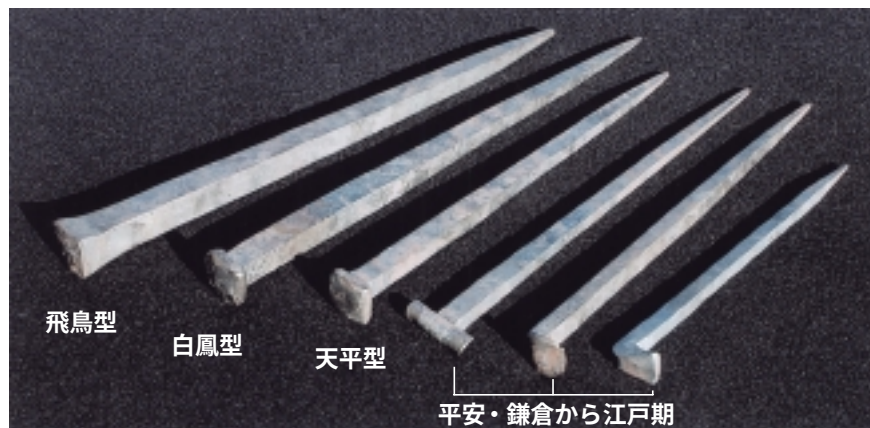




人と出会う、本と出会う

千年の釘に挑む

土佐派鍛冶師 白鷹 幸伯

法隆寺や薬師寺には、和釘が使われている。この釘は、錆びることなく千年以上もつている。現在、私たちが使う釘とは形や大きさが、鉄の成分も違っている。『鉄、千年のいのち』（草思社刊）の著者白鷹幸伯さんは、薬師寺西塔建築にあたり、この千年もつ釘づくりに挑むことになったのである。

鍛冶師の六男に生まれた白鷹さんであったが、昭和三十六年二十六歳のとき単身上京した。大学の夜学に通いながら刃物の老舗日本橋「木屋」に勤めた。その木屋で、昭和四十六年四月二十日、宮大工の棟梁西岡常一さんと出会ったのである。

四十七年、白鷹さんは家業を継ぐことになった。家業を継ぎ、千年もつ釘づくりを決定づけた西岡さんからの手紙には、「木屋を御退任の由、これも亦大自然の法のもとと存念いたします。土佐鍛冶の技法を継承され、技法の底に流れる精神を確っかり御把握あり、名利を思はず、ひたすら御精進祈つてやみません」とあった。

松山市にある白鷹さんの工房で、日ごろ、どんなことを思っているのか、お話を伺った。

「西岡棟梁と出会われたころは、まだ千年の釘については考えていらっしやなかったのですか？」

出会ったころは、ただ古代道具の復元、それだけだった。だから、まさか釘を頼まれるとは思わなかった。ただ機会があれば、釘を作ってみたいとは思った。今の自分の体力と技術があれば釘ができるかなって思っていたから、どんな釘でも作りますから用事があつたら言つてくださいよ。」と言つてい

た。そのころは薬師寺の西塔を建てる計画など知らなかったし。

ところが、それまで和釘を作っていた大阪のほうのじいさんと連絡がとれんちゅうわけ。そしたら、薬師寺の信徒総代の人が「四国のいつも来よる変な鍛冶屋にやらしたらどうか。」と言つてくれた。

「古代の釘は、何かの文献があつてこれは何時代と判明する訳ではないのですよね。」

ないない。釘には文献がない。報告書は少しありますが、古代の建物を修理した人が摘出した木の時代でしか判定のしようがない。釘の形はね、西岡棟梁から来た指図書を見て、こんな釘があつたかということですよ。

この釘は薬師寺の東塔から出てきた天平の釘です。この塔はもとは藤原京にあつたんです。藤原京の時代は白鳳文化ですが、それから天平期に奈良に平城宮ができて、そこへ移築する訳ですよ。そのときに使った釘がこれです。だから白鳳型とはちょっと変わっている。釘の胴がそんなには膨らんでないでしょ。天平期には少し細くなるんです。

「そうして、いろいろ研究の末に千年もつ釘をお作りになったんですね。」

六千九百九十本。薬師寺西塔を建てるとき初めて。こんな形の釘なんか見たことないよ。大工も学者も大陸型の釘は皆忘却し尽くしていた。それを西岡棟梁が復活させた。西岡棟梁は、じいさんの代から国宝の修理ばかりで、一遍も新築はしたことがないの。三代目にしてようやく一遍、薬師寺西塔を新築できた。それもう最高に幸せよ。西岡棟梁は法隆寺の中で育つとるようなもの。飛鳥から白鳳、天平、全部の教科書がそこにはある。鎌倉の修理、元禄の修理、それから明治の修理、全部法隆寺に詰まっていた。



棟梁の話では、平安中期に建てられた法隆寺講堂にはまだ白鳳型の釘が残っていたと。だから時代区分というのはそう簡単に割り切れるものではない。学者だったらはっきりそこで区切ってレポートを書きたいかもしれないが、文化っていうのはそんなもんじゃない。法隆寺には、平安半ばの建築まで、天平ではなく、白鳳期の釘が残っていると言っていた。だけど、ほかのお寺にはもう残っていない。唐招提寺に天平型の釘が残っていたが、それこそ十本くらい。あとは皆、形が違う。それも天平やいうんだけど、どうも怪しい。僕は鎌倉じゃないかと思う。今、文化財保護委員会で研究段階だけどね。

こうして西岡棟梁と会えたこともおもしろいが、それがご縁で、瓦博士の小林章男さんに出会ったこともおもしろかった。この人は、世界中の瓦、中国はもちろん日本の飛鳥時代からずっと、瓦の標本を自分の仕事の収蔵庫に置いてある。古代の瓦はすかさずか軽いのになぜ割れないか、現代の瓦はかんかん音がして水が染み込まないのになぜ割れるか、これはいまだに疑問なんだ。だからそれを一生懸命研究しよるのや。列車の窓から見える瓦と屋根の形を見て、今、どこを走っているかがすぐ分かるんだ。

― 古代の瓦は、樽に貼り付けて作ったそうです。

平瓦というのは、上が広くてカーブがゆるく、下が狭くてカーブがきつい。なぜかという、上にはまた次の瓦が載るから、ゆるくないといけない。ちょうど樽の内側の線に合わせて貼って、樽の線に沿ってナイフで切ったら都合よく瓦ができる訳よ。樽が斜めになっところ。

― 明治になって西洋の学問が入り、上下のカーブが同じ瓦にしたら通気性がなくなり、その下の木をだめにしてしまったそうです。

瓦をね、固形物として考えとるからいかんのよ。西洋的な考え方で寸法をきちつと合わせると、毛細管現象でずうつと水が上がっていつて、下の露地板全部腐らせる。十円玉が入るくらいの隙間があつてはじめて、天気の良い日には中まで風が入り乾燥する。大自然の摂理に従つてね。そこが西洋建築の石の考え方と日本建築の木の考え方とが違うところですね。

― ところで、これからの子どもたちには、どんなふうに育ってほしいですか？

ノーベル賞をとった小柴さんも、田中さんも小さいことじつと何十年も集中できるいうことは、研究の対象そのものへの理解があつたからできること。ただ研究して発表してやろうという野心でなしにね。田中耕一さんのお父さんは目立て職人やそう。鋸の目をよく切れるように磨る地道な仕事。それを田中さんは背中から見ている。だから、地道な仕事が平気だったんだらうね。小柴さんは、鉱山跡の地下の底でじつと待った。そんなとてつもないことにじつと耐えて待つというのは、表街道を走る学者にはできないわな。「私は落第生でそれに耐えられた。」と言つとったね。

― 今の子どもたちをそういう地道な世界に初めからぱんとほったり込めるかというところが難しいですね。

それはちよつと無理。そんなこと言つたらあかん。テレビも見なきゃいけないし。うちの子もゲームで育った。ただ、もっと自然のね、虫や蛙や蛇とか、木や石や土とかを見て育つといいなと思う。そうでないと人類は破滅に陥ってしまうわ。これからの子や孫に文化の護持存続をお願いするほかに方法はない。文化遺産を、過去の人たちがそうして残してくれたようにね。

― そうですね。今日はありがとうございました。